

低炭素型セメント結合材の活用による コンクリート構造物の耐久性向上

(国研) 土木研究所
先端材料資源研究センター
古賀裕久

目次

1. 低炭素型セメント結合材とは
2. 低炭素型のコンクリートの特性
3. 技術基準等の対応

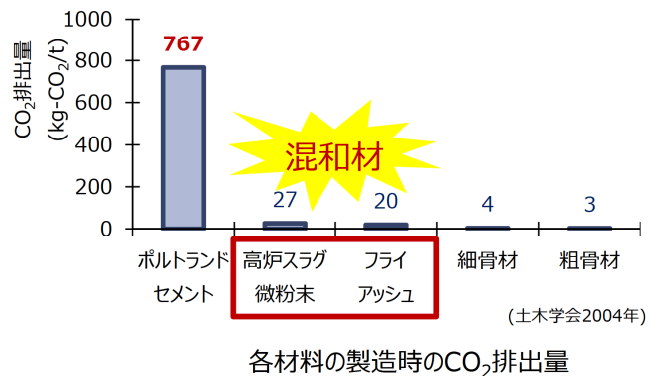
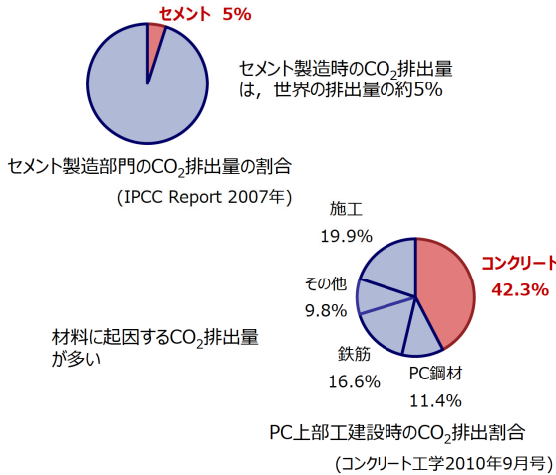
低炭素型セメント結合材とは

- 混和材（高炉スラグ微粉末，フライアッシュ等）を従来よりも多量に使用した結合材
- コンクリートの製造に関連するCO₂排出量の削減が可能

低炭素型セメント結合材



ポルトランドセメント 高炉スラグ微粉末 フライアッシュ



低炭素型セメント結合材を使用したコンクリート

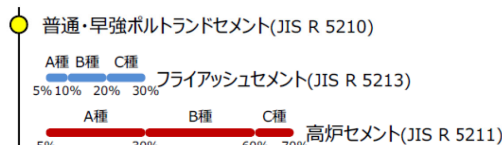
部材の種類	想定する範囲
・プレストレストコンクリート	早強ポルトランドセメントの一部を高炉スラグ微粉末あるいはフライアッシュで置換
・鉄筋コンクリート ・無筋コンクリート	高炉スラグ微粉末やフライアッシュ等を含めた混和材の置換率を高炉セメントC種の上限值以上（70%以上）

従来のセメント

ポルトランドセメント 100%

VS.

低炭素型セメント結合材



低炭素型セメント結合材

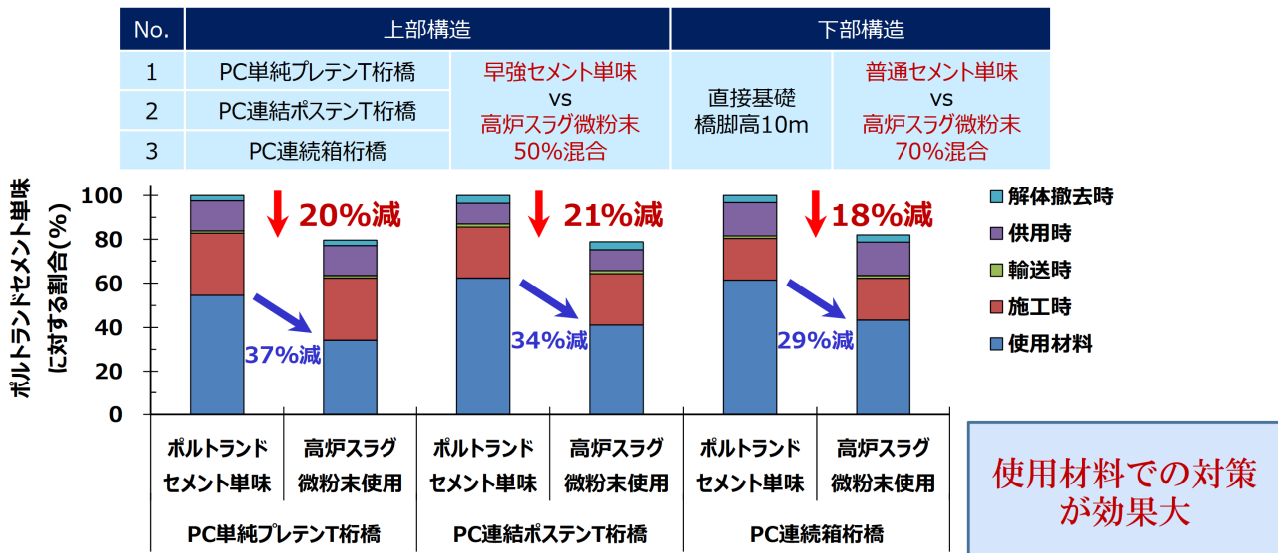
- ・プレストレストコンクリート：早強ポルトランドセメントの一部を混和材で置換したコンクリート
- ・鉄筋コンクリート・無筋コンクリート：混和材の置換率を高炉セメントC種の上限值以上（70%以上）としたコンクリート

混和材の置換率：高
二酸化炭素の排出削減効果：大

※百分率は混合セメントの混和材の置換率を表示

二酸化炭素排出削減効果の試算例

- プレストレストコンクリート道路橋で、ライフサイクルを通じたCO₂排出量を約2割削減可能



低炭素型セメント結合材の特長と課題

- 特長**
 - CO₂排出量の削減
 - 産業副産物の有効利用
 - コンクリートの品質向上
(塩分浸透, ASR抑制, 長期強度, 温度上昇量, etc.)
- 課題**
 - 従来品と大幅に異なるコンクリートを使用可か?
 - 既存の試験/設計/施工方法で対応が可能か?
 - コンクリートの品質低下?
(中性化抵抗性, 初期強度, 養生期間延長, etc.)

既存の技術基準では想定されていない新材料をどう使っていくか

既往の規・基準類における課題

道路橋示方書 III編 コンクリート橋編 (日本道路協会) H24

- 上部構造に使用するコンクリート材料は、JIS規格に適合するものを用いることを標準とする
- 高炉セメントについては、クリープや乾燥収縮特性について必ずしも明確になっていないため、原則としてコンクリート橋の上部構造の材料としては使用しない

コンクリート標準示方書 (土木学会)

- セメント及び混和材はJISに適合するものを用いるのが標準
ただし、養生日数など施工方法の規定は混合セメントB種相当まで



- 混和材を高含有したコンクリートでの対応方法？
- 普通セメント以外のセメントと混和材を組み合わせたコンクリートでの対応方法？
- 3種類以上の混和材を同時に用いたコンクリートでの対応方法？

土木研究所の研究状況

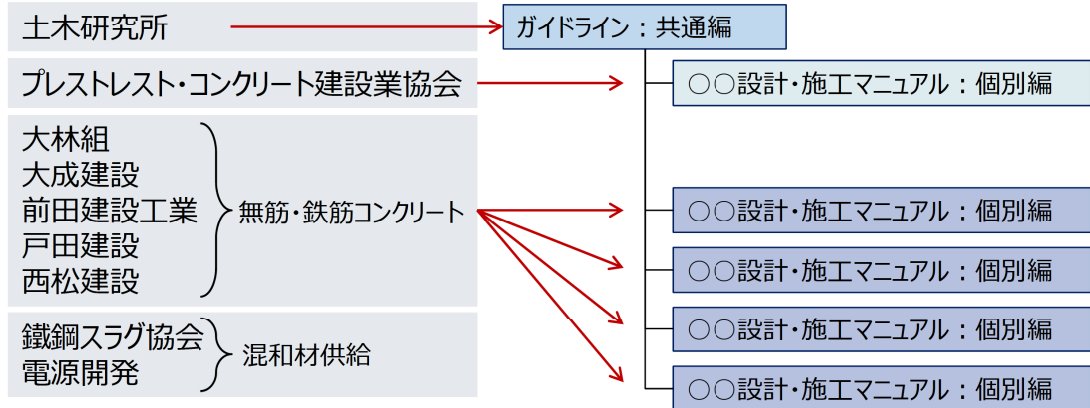
- 低炭素型セメント結合材の利用技術に関する共同研究 (H23～H27)
- 新設プレストレストコンクリート橋の品質・信頼性向上方法の構築に関する共同研究 (H29～R3)

低炭素型セメント結合材の利用技術に関する共同研究（H23～H27）

目的: 低炭素型セメント結合材を用いたコンクリート構造物の設計・施工ガイドライン(案)および、個別の構造や配合に特化した設計・施工マニュアル(案)の提案

期間: 2011年度～2015年度 (5年間)

参加機関:

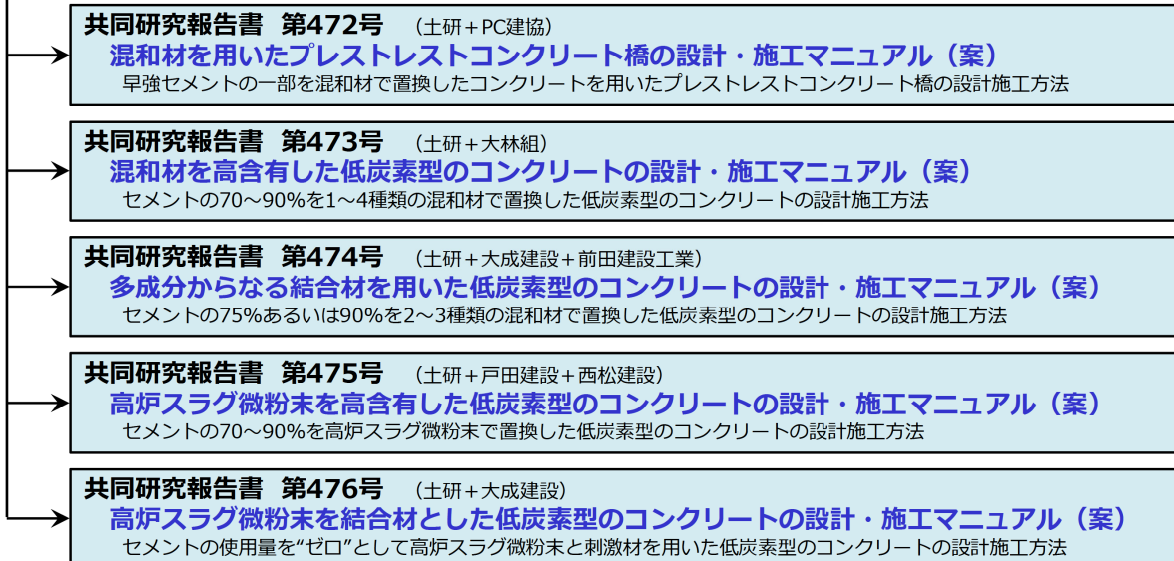


ガイドラインとマニュアルの構成

共同研究報告書 第471号 (全9機関)

低炭素型セメント結合材を用いたコンクリート構造物の設計・施工ガイドライン (案)

→ 共通編：低炭素型セメントを用いたコンクリート構造物の設計及び施工の原則を規定



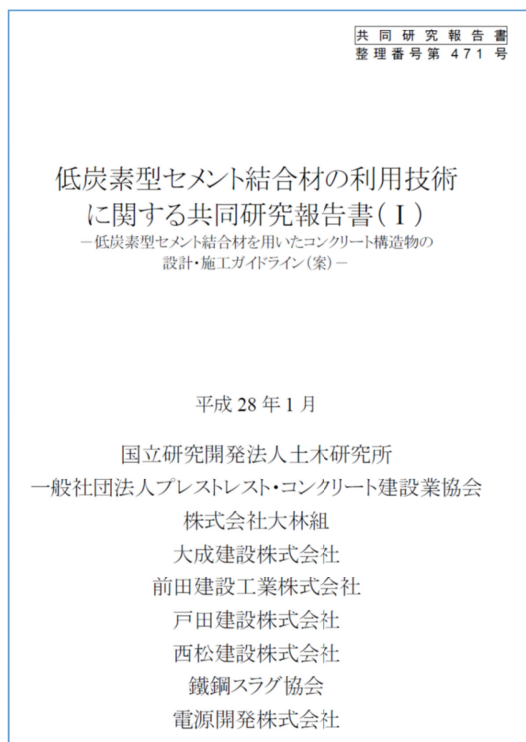
→ 個別編：構造物の種別や配合ごとに5種類の低炭素型のコンクリートの設計及び施工の方法を規定

他に、共同研究報告書 第487号
フライアッシュに関する試験結果

※2016年1月発刊

※土木研究所ホームページでダウンロード可

ガイドラインの構成



- 1章 総則
- 2章 低炭素型セメント結合材を用いた
コンクリートの品質
- 3章 材料
- 4章 配合
- 5章 設計
- 6章 製造及び施工
- 7章 品質管理
- 8章 検査
- 9章 記録
- 付録資料 (実験及び解析の結果)

品質において特に着目した事項

ワーカビリティ

- ・フレッシュコンクリートの特性，経時変化に対する配慮

強度

- ・湿潤養生期間の影響，温度の影響

クリープ・収縮

- ・プレストレストコンクリートへの適用

耐久性

- ・中性化に対する抵抗性
- ・塩化物イオン浸透に対する抵抗性
- ・凍結融解に対する抵抗性
- ・化学的侵食，アルカリシリカ反応，長期的な安定性

ひび割れ抵抗性

- ・若材齢時の温度変化，自己収縮ひずみに起因するひび割れ

環境負荷低減効果

- ・二酸化炭素排出削減効果

検討例1：暴露試験による耐久性の評価

国内3ヶ所に暴露



新潟

14.8°C
77.3%RH
4,830mm



つくば(屋外)

15.5°C
72.9%RH
2,580mm



つくば(室内)

23.9°C
41.8%RH
0.051%CO₂



沖縄

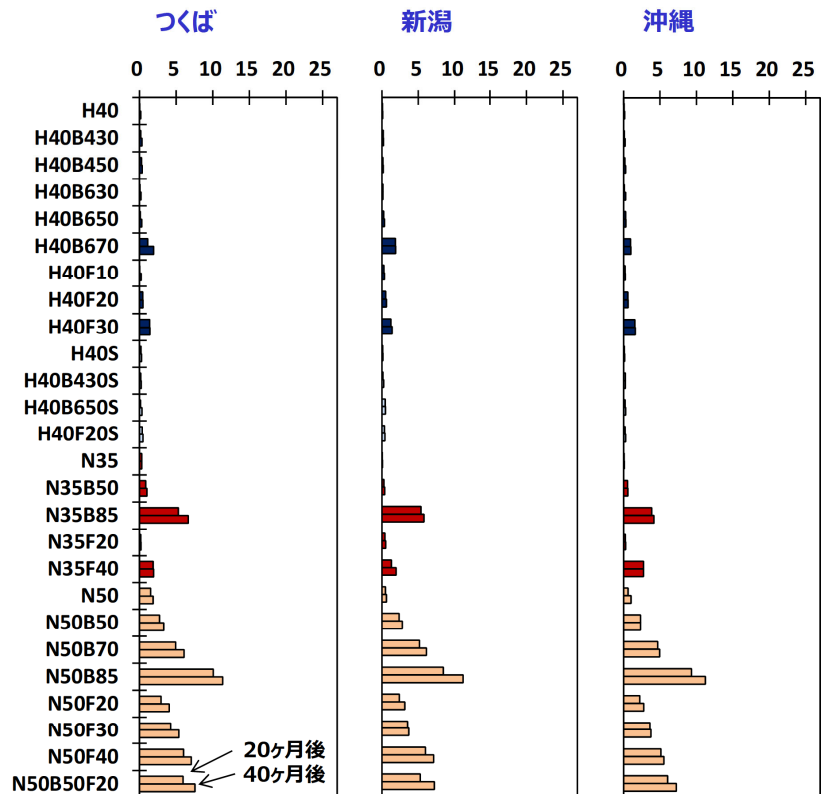
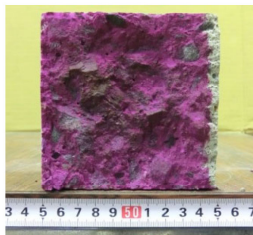
23.3°C
75.5%RH
4,085mm

※大気中CO₂濃度 = 0.039%
(気象庁HP)

暴露期間	2, 4, 10, 20年 (2012.2開始)
配合	26種類
ベースセメント	普通(RC配合), 早強(PC配合)
高炉スラグ微粉末	普通ベース 50,70,85% (4000) 早強ベース 30, 50, 70% (4000, 6000)
フライアッシュ	普通ベース 20, 30, 40% (Ⅱ種) 早強ベース 10, 20, 30% (Ⅱ種)
水結合材比	普通ベース: 35, 50%, 早強ベース: 40%

中性化

暴露後の中性化深さ

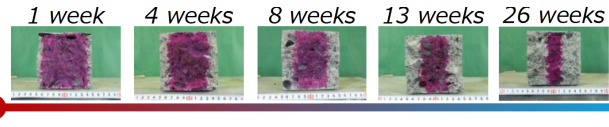


Note:

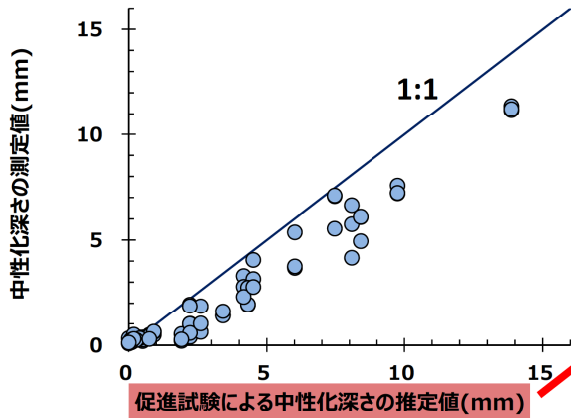
- H : 早強ポルトランドセメント
- N : 普通ポルトランドセメント
- B, B4 : 高炉スラグ微粉末4000
- B6 : 高炉スラグ微粉末6000
- F : フライアッシュⅡ種

中性化深さの推定

促進中性化試験 (JIS A 1153)
 $5 \pm 0.5\% \text{CO}_2$, $20 \pm 2^\circ\text{C}$, $60 \pm 5\% \text{RH}$



中性化深さの測定値と推定値



中性化深さの推定値

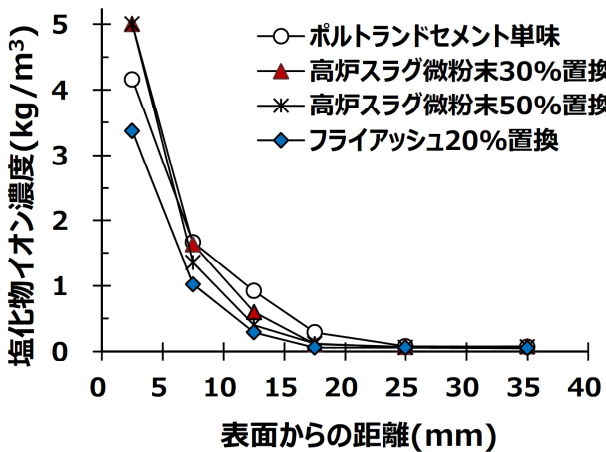
$$C = A_{ACT} \sqrt{\frac{\text{CO}_2}{\text{CO}_{2ACT}}} \sqrt{t} \rightarrow \text{暴露期間}$$

促進試験による中性化速度係数 \rightarrow A_{ACT}
 実環境 $\approx 0.04\%$ \rightarrow CO_2
 促進試験 $= 5\%$ \rightarrow CO_{2ACT}

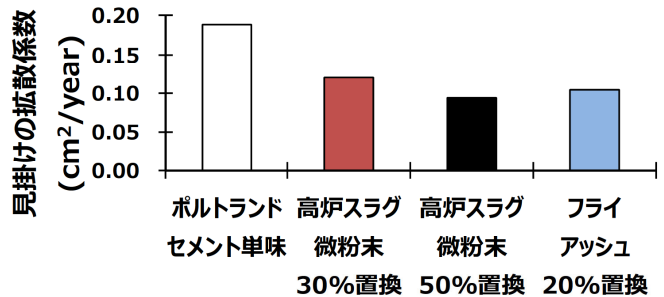
塩化物イオン浸透

中性化深さの小さい供試体 : $W/B = 40\%$

塩化物イオン浸透量



塩化物イオンの見掛けの拡散係数



$$C(x, t) = \left((C_0 - C_i) \left[1 - \text{erf} \left(\frac{x}{2\sqrt{D_{ap}t}} \right) \right] \right)$$

見掛けの拡散係数

検討例2：クリープ

持続載荷試験

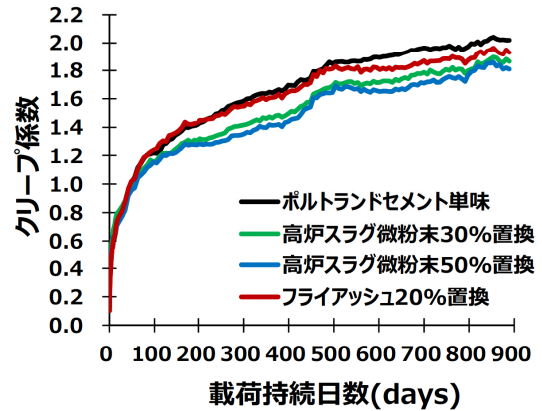


載荷開始材齢: 3, 7, 28, 365日
 載荷荷重: $0.2 f'_c$ (載荷開始材齢3日)
 $0.3 f'_c$ (載荷開始材齢7, 28, 365日)
 W/B: 40% (ポルトランドセメント単味)
 35% (混和材使用)
 ※材齢3日の圧縮強度を同等とするためW/Bを調整

載荷開始材齢3日のクリープ係数

$$\phi = \frac{\varepsilon_c - \varepsilon_{sh} - \varepsilon_i}{\sigma_c} E_{28}$$

圧縮力を負荷した供試体のひずみ
 同形状・同条件で製作した圧縮力を負荷していない供試体の収縮ひずみ
 載荷時の弾性ひずみ
 材齢28日まで水中養生した円柱供試体の静弾性係数
 圧縮応力度



検討例3：乾燥収縮・自己収縮

長さ変化試験

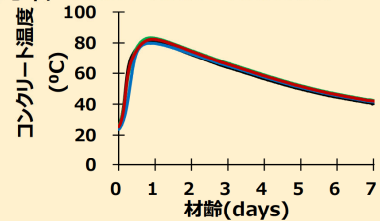


JIS A 1129-3
 20±2 °C, 60±5 %RH
 100×100×400mm

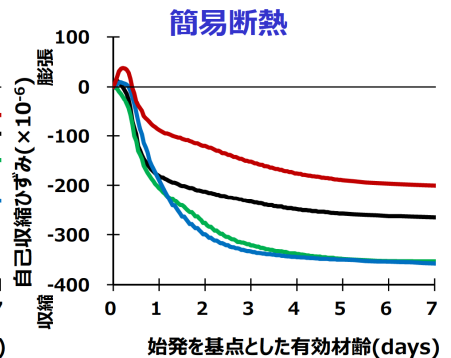
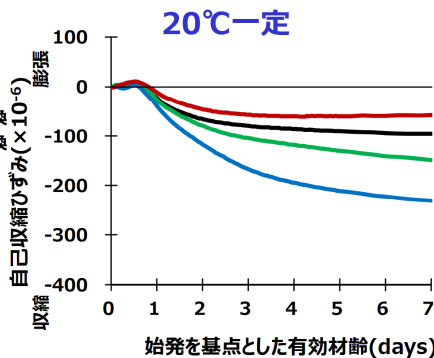
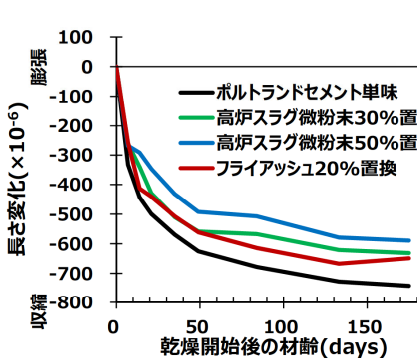
自己収縮試験



簡易断熱 (マスコンクリート模擬)
 立方体400×400×400mm



20°C一定 (JCI試験法)
 角柱100×100×400mm



低炭素型のコンクリート（PC配合）特性

- H23～H27検討，代表的な配合
 - 高炉スラグ微粉末4000，置換率30%
 - 高炉スラグ微粉末6000，置換率50%
 - フライアッシュ，置換率20%
 ※水結合材比35～40%（少し低くする）
- 養生期間は従来同様
- 中性化速度（促進環境）は無置換の場合より大きいですが，水結合材比が小さいため十分な抵抗性を有す
- 塩分侵入抵抗性が向上
- クリープ・乾燥収縮等は，従来と同様な特性値を用いることが可能
- 温度ひび割れが懸念される場合は，温度応力解析の結果等に基づき，温度ひび割れに対する抵抗性を評価

新設プレストレストコンクリート橋の品質・信頼性向上方法の構築に関する共同研究

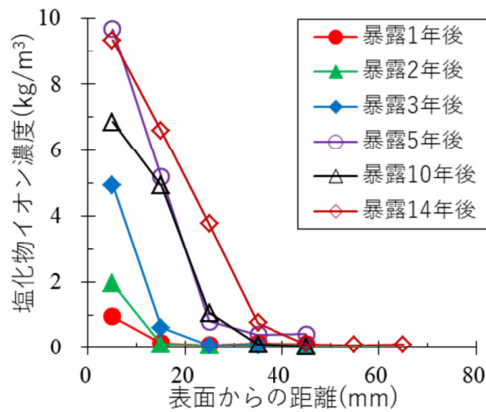
- プレストレストコンクリートを想定した配合について継続検討
 - 水結合材比が小さいと，中性化は顕著でない
- 塩分侵入に対する抵抗性の高さを定量的に評価
- プレキャスト部材・製品は，硬化した状態で出荷されるため，高い品質を確認した上で活用可能

塩害環境での長期暴露試験結果

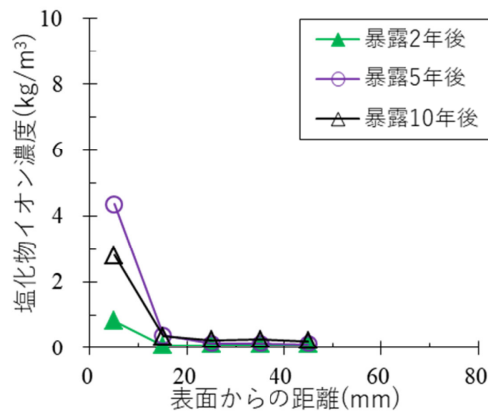
- 混和材を活用したコンクリートは、見かけ上塩分の浸透深さが停止することも



新潟県 (関屋)



塩化物イオン濃度分布
(W/C=40%, 早強セメント)
従来のPC用コンクリート



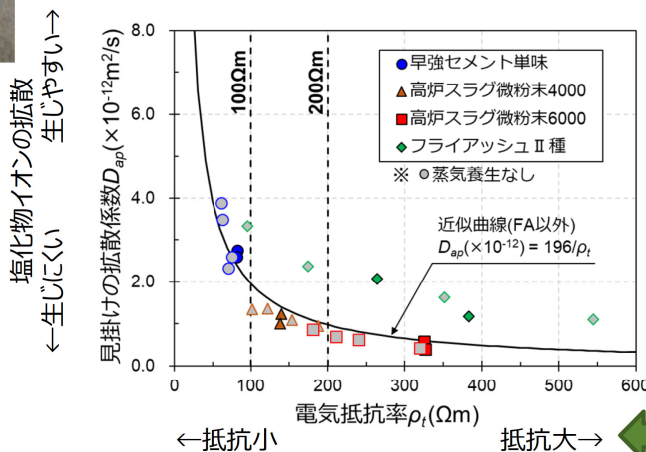
塩化物イオン濃度分布
(W/C=40%, 早強+高炉スラグ)
混和材を活用したPC用コンクリート (例)

塩分浸透抵抗性の高いコンクリートの分類

- 電気抵抗率による簡易な評価を提案能



塩水浸せき試験



電気抵抗率試験

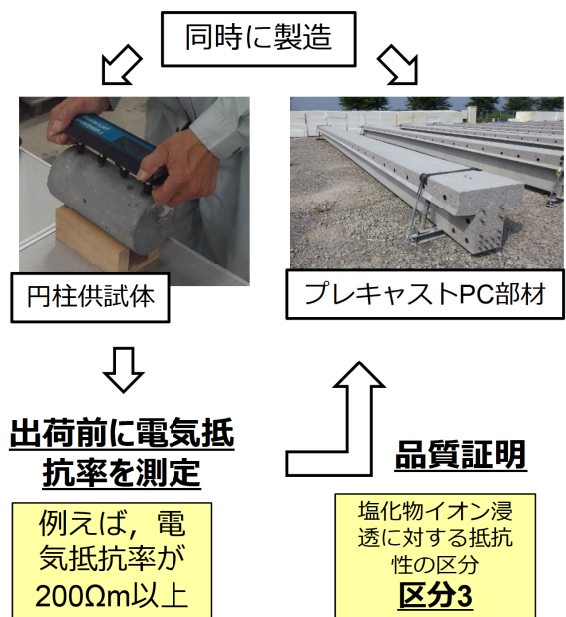
- 他の方法と比較し、短時間で実施可能
- 誤差は、圧縮強度試験と同程度
- 温度一定 (20℃) の環境で測定
- 試料を乾燥させると電気抵抗率が上昇

塩分浸透抵抗性の高いコンクリートの分類

	区分	電気抵抗率 (Ωm)	各区分に対応する結合材の例 ※水結合材比：32～40%のとき	塩分浸透抵抗性の程度 ※塩害の影響が激しい環境での防食
従来より向上	区分1 従来のPC用コンクリート	100未満	早強ポルトランドセメント単味	かぶりのみで鋼材の腐食を防ぐことは困難
	区分2 区分1と区分3の間	100～200	高炉スラグ微粉末4000, 30%置換	かぶりのみで鋼材の腐食を防げる可能性あり
従来より大きく向上	区分3 塩化物イオンの浸透が見かけ上停止するようなコンクリート	200より大	高炉スラグ微粉末6000, 50%置換 フライアッシュII種, 20%置換	これまでの知見では, 塩分浸透が見かけ上停止することが期待される

プレキャスト部材での活用

- **プレキャスト部材で塩分浸透抵抗性を確認する方法**
 1. プレキャスト製品の製造時に同時に円柱供試体を作成, 蒸気養生後, 水中に保管
 2. 出荷前に電気抵抗率を測定して, コンクリートの塩分浸透抵抗性を確認
- **製品の品質を直接確認**できるので, 設計通りの構造物であることの信頼性が向上
- 新しい材料でも安心して使用できるため, **耐久性向上効果を設計に反映できる可能性**



技術基準等の対応（道路橋示方書）

- 平成24年 III編 20章 施工 20.4 材料
20.4.2 コンクリート（解説）
 - 高炉セメントについては、初期強度の発現が要求される上部構造に使用された実績が少なく、クリープや乾燥収縮特性について必ずしも明確になっていないため、原則としてコンクリート橋の上部構造の材料としては使用しないこととする。



- 平成29年 III編 17章 施工 17.6 材料
17.6.2 コンクリート（解説）
 - 普通ポルトランドセメント及び早強ポルトランドセメント以外のセメントをコンクリート橋の上部構造に用いる場合には、クリープや収縮等コンクリートの種々の特性について確認する必要がある。なお、I編に示されていない材料でも、クリープや収縮等コンクリートの種々の特性について確認されたもの、多くの実績を持つものについては、その取扱いに十分注意し、使用してもよい。

技術基準等の対応（コンクリート道路橋設計便覧）

- 設計便覧 2.4 材料の選定
2.4.2 コンクリート
 - 混和材の効果を一般論として記載
 - 検討事例として、低炭素型セメント結合材の共同研究報告書（プレレストレストコンクリート部分）を紹介
 - 早強ポルトランドセメントの30%を高炉スラグ微粉末4000, 50%を高炉スラグ微粉末6000, あるいは、20%をフライアッシュII種で置換したコンクリートでは、水結合材比を低減した場合
 - 圧縮強度とヤング係数の関係は従来と同様
 - クリープ、乾燥収縮は従来の式を用いることができる
 - 塩化物イオンの侵入が抑制される
 - 水結合材比40%以下とした場合、中性化の進行は極めて遅い

これらの観点で、道示への適合性が検証されている

まとめ

共同研究報告書は、iMaRRC HPから無料でダウンロード：
<https://www.pwri.go.jp/team/imarrc/research/tech-info.html>

1. 材料の低炭素化は、CO₂排出抑制に効果的
2. 低炭素型セメント結合材を用いたコンクリートの評価方法をにとりまとめた
 - 共同研究報告書471～476号， 487号
3. プレキャストPC部材の場合，出荷時に従来より塩害に強いことを確認した上で用いることも可能
 - 共同研究報告書559号
4. 技術基準への適合性を検討した事例，ぜひ活用を！